

ニュージーランドのオープン・ポリテクニクにおける 学童保育指導員養成課程の検討

－ 大学における学童保育指導員養成に関する研究（その2） －

住野好久

(中国学園大学 現代生活学部)

松本歩子

(奈良教育大学 家庭科教育講座 (保育学))

植木信一

(新潟県立大学 人間生活学部)

鈴木瞬

(金沢大学 人間社会研究域学校教育系)

中山芳一

(岡山大学 全学教育・学生支援機構)

A Study on the Training Course of After-School Childcare Instructors in the Open Polytechnic of New Zealand:

A Study on the Training of After-School Childcare Instructors in Universities (Part 2)

Yoshihisa SUMINO

(Faculty of Contemporary Life Science, Chugoku Gakuen University)

Ayuko MATSUMOTO

(Department of Home Economics, Nara University of Education)

Shinichi UEKI

(Faculty of Human Life Studies, University of Niigata Prefecture)

Shun SUZUKI

(Faculty of Education, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University)

Yoshikazu NAKAYAMA

(Institute for Education and Student Services, Okayama University)

要旨：学童保育の質的向上には学童保育指導員養成・研修の質的向上が必要である。そのための方策として、大学における学童保育指導員養成を行うための養成教育の内容や方法を明らかにすることが研究の目的であり、本論文では海外の先進事例としてニュージーランドのオープン・ポリテクニクにおける指導員養成課程を検討した。その結果、内容としては①子ども中心の学童保育実践力、②コミュニケーション能力、③行動ガイダンス力、④安全マネジメント力の育成が重視されていること、方法としては通信教育の中でオン・ジョブ・トレーニングによる「実習」が位置づけられ、理論と実践の往還ができる学習方法が行われていること等が明らかとなった。そして、2019年度にこの養成課程が終了した大きな要因に資格制度と結びついていなかったことや現場の多様性に対応していなかったことがあること等を指摘した。

キーワード：放課後児童クラブ After-school childcare center

O S C A R Out of School Care and Recreation

遠隔教育 Distance education

1. はじめに

1.1. 学童保育指導員養成の高度化の必要性

2020年3月から新型コロナウイルス感染症対策として全国の学校が休校となる中、多くの学童保育所（放課

後児童クラブ）は保護者に利用自粛を求めながらも開所し続けた。学童保育指導員は感染症対策に最大限配慮しつつ、まさに「体を張って」子どもたちの健康と保護者の就労を守ったのである。このとき、学童保育指導員には新しい感染症に対する知識はもちろん、子どもの心身の健康管理や衛生管理に必要な知識やスキルを学び、発

揮しながら、子どもたちがストレスを蓄積することのないよう配慮して学童保育に取り組んだ。このような、新しい状況に対応しながら創造的に実践を行うためには、学童保育指導員に高い専門性が求められる。

2015年度から実施された子ども・子育て支援新制度において放課後児童健全育成事業は「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」に基づいて実施されるようになり、24時間の研修が義務づけられた「放課後児童支援員」という資格を持った職員を学童保育所の各支援単位に1名以上配置することが国の基準に示された。

この「放課後児童支援員」資格を取得するための基礎資格には保育士、社会福祉士、教員の資格や大学で社会福祉学、心理学、教育学、社会学、芸術学若しくは体育学を専攻した等、高等教育で取得する資格が位置づけられているが、「5年以上放課後児童健全育成事業に従事した者であって、市町村長が適当と認めたもの」¹⁾という学歴を問わないものもある。この資格は学童保育指導員に求められる専門性を担保できるものになっているのだろうか。

1.2. 大学における学童保育指導員養成の現状

ルーティン・ワークとしてではなく、個々の子どもや状況に応じて創造的に実践を開発できる専門的力量を持った専門職として学童保育指導員を養成するためには、乳幼児保育の保育士と同様に、大学レベルでの養成が求められる。学童保育に関する高度な理論知を持った研究教員、高度な実践知を持った実務家教員が、理論的かつ実践的なカリキュラムに基づいて教育・研究指導を行う学童保育指導員養成課程である。ところが、現在日本では、中国学園大学、鈴鹿大学等ごくわずかな大学において学童保育指導員のための民間資格を養成しているにすぎない²⁾。

世界的にも、大学で学童保育指導員に固有な資格を養成しているのは、スウェーデンやオーストラリア等わずかな国に限られている。韓国では学童保育を行っている施設の一つである地域児童センターの職員に求められる社会福祉士2級の資格養成が大学で行われている³⁾。世界的に学童保育の量的な拡大は進んでいるが、その質的な向上、特に、指導員の資格制度や大学における指導員養成については、まだこれからの課題となっている。

1.3. 本研究の目的と方法

大学における学童保育指導員養成課程を編成するためには、養成すべき専門性、教育内容・教育課程、教育・学習の方法、評価法等を明らかにする必要がある。これらに関する先行研究は数少ないが、杉山隆一は専門学校における保育士養成課程に学童保育指導員に求められる専門性を養成するための独自の科目を加え、学童保育に固有の目的・役割、内容・方法、歴史・制度、運営形態及び保護者・地域・学校との連携等を学習することで学童保育指導員に固有な資格を取得できるカリキュラムを

提案している⁴⁾。これを発展させて、中田周作らは大学・短期大学に設置しやすい学童保育指導員養成カリキュラムとその運用方法について提案した⁵⁾。しかし、これらの研究は、その後の「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準」「放課後児童クラブ運営指針」や「放課後児童支援員」の資格制度との関係が明確ではなく、これらとの整合性をつけた新しいカリキュラムの開発が求められている。また、養成課程の質保証に必要な学習成果の評価法や実習の質を高めるための実習指導者の養成等についても検討されていくべき段階にきている。

このような今日的な状況をふまえた新たな大学における学童保育指導員養成課程カリキュラムやその実施体制を検討するためには、諸外国の先行事例を研究することも有用である。これに関しては、松村祥子・野中賢治らがイギリス、スウェーデン、フランス、オーストラリア、韓国、日本の6か国における学童保育指導員の資格、養成機関、業務、勤務体制、指導員数等について比較検討しているが、大学における学童保育指導員養成課程の教育目標・内容、実施体制等については概述されているだけで、例えば、個々の授業科目の目標・内容については全く示されていない⁶⁾。そのため、昨年度我々は、大学での学童保育指導員養成を実施しているスウェーデンを取り上げてその養成教育の目標・内容・方法等を検討した⁷⁾。スウェーデンは学童保育と学校教育とを一体化し、学校教員の養成制度の中に学童保育指導員養成を包含するものであるが、日本では学童保育は児童福祉に位置づけられ、学校教育との一体化は困難であるため、直ちにスウェーデンの仕組みを日本に導入することはできない。

そこで本研究では、学童保育を日本と同様に児童福祉に位置づけ、多様な運営主体による多様な学童保育を容認するニュージーランドに着目する⁸⁾。そして、ニュージーランドにおいてオープン・ポリテクニク（以下、OPNZと略す。）という通信制総合専門学校で行われた指導員養成を取り上げ、その教育内容・課程、教育・学習方法、評価法等を明らかにすることを目的とする。また、このOPNZにおける学童保育指導員養成は2019年度をもって終了してしまったので、その理由についても検討したい。

研究方法としては、OPNZの学童保育指導員養成コースのテキストを翻訳し、それを分析する。テキストはOPNZが編集した「4290 Introduction to Out of School Care and Recreation」と「4291 Extension to Out of School Care and Recreation」（いずれも2012年11月改訂版、非売品）である。さらに、ニュージーランドでこのコースの企画・実施に参画したメンバーにインタビューして得た情報も活用する⁹⁾。

2. ニュージーランドにおける学童保育制度

2.1. OSCAR 制度の概要

ニュージーランドの女性就業率は日本より高い¹⁰⁾が、14歳未満の子どもを子どもだけにしておくことは法律で禁じられている¹¹⁾ため、子どもに留守番させることはできない。そのため、放課後の子どもたちに関わる様々な団体等によるスポーツや自然体験活動、芸術活動等が行われている。有料で授業前、放課後、休日に子どもたちを受け入れる事業は様々な団体によって実施されているが、利用料は1日10～20ドルと利用者負担は重い。そこで、政府は主に低・中所得者層の子どもの放課後等にケアとレクリエーションを提供するために、OSCAR (Out of School Care and Recreation) 認可制度を行っている。この制度は社会開発省が基準を満たした事業者(コミュニティ組織、学校理事会、民間企業、地方自治体等)をOSCARプロバイダーとして認可して補助金を出し、施設・事業(OSCARプログラム)の開設・運営の助成を行う。現在、OSACRプロバイダーは700以上、OSCARプログラムは1200以上ある¹²⁾。これが日本における放課後児童健全育成事業及び放課後児童クラブ(学童保育所)にあたる。

OSCARプログラムは、5歳から13歳までの子どもたちを対象とし、学校のホールや教室、教会の施設、コミュニティセンター、スポーツクラブ等の施設を使って、月曜日から金曜日の授業前と放課後、学校休業日に、計画的な活動と自由な遊び時間を組み合わせて実施される。おやつも提供される。

国はOSCARプログラムの利用者で、保護者が労働、疾病、障害、子ども等の看護・介護をしている低・中所得者には、所得に応じて、週に最大20時間分の授業前と放課後のプログラム利用分、及び週50時間分の長期休暇プログラム利用分の補助金を提供する¹³⁾。

2.2. 指導員の養成・研修制度の現状

OSCARで指導員として働くための指導員に固有な国家資格はない。OSCARとしての認可を得るための基準が指導員に求めているのは、所属するOSCARプログラムが提供するサービスの内容にふさわしい資格を持っていること(例えば、乗馬、ロッククライミング、カヤックに関する資格)、応急処置の研修を修了していること、ポリス・チェックを受け、特定の犯罪歴がないこと等である¹⁴⁾。

また、この基準には、各OSCARプロバイダーが全スタッフに適切な研修を行い、専門能力開発の機会を提供することを求めているが、国としての指導員の養成・研修は実施していない。そこで、各プロバイダーは独自にスタッフを対象とした研修を実施している。また、指導員が自主的につくった全国的な組織である Out of

School Care Network : OSCN (約200のプロバイダーが加盟。本部はオークランド)¹⁵⁾とOSCAR Network (約180のプロバイダーが加盟。本部はクライストチャーチ)¹⁶⁾が企画・実施する研修会に参加する場合もある。そして、もう一つの研修の機会であったのがOPNZであった。

3. OPNZの仕組みと現状

3.1. 通信制総合専門学校OPNZの概要

ニュージーランドの高等教育機関には、8校の国立総合大学(University)、16校の工科大学/ポリテクニク(Institutes of Technology and Polytechnics (ITPs))、3校のマオリ高等教育機関(Wānanga)、約550校の私立の実務訓練施設(Private Training Establishment)及び英語学校(English language school)等がある。

工科大学/ポリテクニクは総合専門学校で、専門知識の習得や技術訓練を目的としている。義務教育修了後、16歳から入学でき、修了後は総合大学に編入できる。実践的な職業訓練教育に力を入れており、学位とは関係なく短期間で技術の修得を目指すコースから、資格修得を目指す長期コースや、Diploma(準学士号)、Bachelor(学士号)、Master(修士号)の学位も取得できるコースがある¹⁷⁾。

2020年4月1日、職業教育をめぐる改革が行われ、従来の工科大学(Institutes of Technology)とポリテクニクは一括して運営されることとなった¹⁸⁾。そして、ワークベース(オン・ジョブ・トレーニング)、キャンパスベース(対面授業中心)、オンラインを統一した職業教育のシステムを整備を行なった。この中の、オンラインによる学習システムで職業教育を行うのがOPNZ(Open Polytechnic of New Zealand)である。

OPNZは1946年に設立された、オープン・ディスタンス・フレキシブル・ラーニングを専門としたITPである。学習者が物理的なキャンパスでフルタイムの学習に参加することなく、現在または将来のキャリアに必要なスキルを獲得できる100以上の資格と約1,000のコースを提供している。ニュージーランド全土と海外からの学生約30,000人が、コースウェアにオンラインでアクセスできるだけでなく、学術スタッフのサポート、図書館サービス、追加の学習サポートも利用しながら学んでいる。学生の82%は25歳以上である。大学・大学院レベルの学位は「会計・ビジネス」「応用管理」「心理学」「コミュニケーション」「情報技術」「図書館情報学」「社会の健康と福祉」「環境」「ソーシャルワーク」「エンジニアリング技術」「幼児教育」で提供されている。また、「建設管理」「エンジニアリング」「小規模ビジネス」「心理学」「情報技術」「健康と福祉」「法務と不動産」「薬局」「教員補佐」「財務アドバイザー」等に関する修了証明書(certificates)と準学士号が提供されている¹⁹⁾。

3.2. OPNZにおける学童保育指導員養成コースの概要

OPNZに学童保育指導員を養成するコースが設置されたのは2003年である。1994年にOSCARプログラムへの国庫補助要請運動や指導員研修等を行う全国組織として設立された全国OSCAR協会（NAOSCAR：National Association for Out of School Care and Recreation）は、2001年からOPNZと指導員養成課程の開設について議論を始めた。そして、2003年に20単位の修了証明書（Certificate）が発行されるコースを開設し、同年は180人以上の学生がこのコースの修了証明書を取得した。2006年からは40単位の修了証明書を発行するコースが開設された。これは2つの20単位のコースで構成されている。「4290 OSCAR 入門コース」と「4291 OSCAR 発展コース」である²⁰⁾。

3.2.1 「入門コース」概要

「入門コース」は200時間・32週間の学習を標準とするコースである。ニュージーランド資格機構（NZQA）による資格枠組みではレベル4（高校卒業程度のレベル）であり、修了すると修了証明書が得られる。

この入門コースで得られる学習成果として示されているのは、以下の2点である²¹⁾。

- 1) 放課後事業、OSCAR、指導員の役割について概要を理解できる。
- 2) OSCARプログラムでより効果的に働くために習得した基本的な知識、スキル、理解を活用できる。

つまり、指導員に求められる基礎的な知識の理解と基本的な実践力の育成が目指されている。

このコースの受講要件として以下が示されている²²⁾。

- 1) 16歳以上
- 2) OSCARプログラムへのアクセスを手配すること（入学期間中に少なくとも60時間以上、雇用されている時間と同じ時間帯に、職員あるいはボランティアとしてOSCARプログラムで活動する必要がある）
- 3) 過去12か月以内に行われた明確なポリス・チェックの証拠を提出すること

注目すべきは、受講中に課題に取り組むために、OSCARプログラムに職員あるいはボランティアとして60時間以上の活動が求められていることである。上述したように、OSCARには「授業前プログラム」「放課後プログラム」「休日プログラム」があるが、どのプログラムでもかまわない。その際、以下のような条件が示されている²³⁾。

- 1) 授業前プログラムおよび/または放課後プログラムで活動する場合、少なくとも2学期間（または20週間）にわたって少なくとも週3時間働く必要がある。
- 2) 休日プログラムで活動する場合、少なくとも2つの休暇期間にわたって、休暇期間ごとに少なく

とも30時間活動する必要がある。

なお、いずれの場合も、OSCARプログラムでは少なくとも以下の時間活動する必要がある。

- ・課題1を提出する前に10時間
- ・課題2を提出する前に25時間
- ・課題3を提出する前に25時間

3) 32週間の登録期間中、週に5～10時間学習する必要がある。このコースを完了する最小時間は登録から20週間である。活動時間は学習時間に加えらる。

このように、学習過程で継続的にOSCARプログラムで活動すること、そして、OSCARプログラムでの活動時間も合わせて20～32週間、計200時間の学習が求められている。

このコースのカリキュラムは、5つのモジュールとモジュールでの学習を評価するために取り組む3つの課題（Assignment）から構成される。

モジュール1 学習の準備

1. NZにおけるOSCAR制度の歴史
2. 海外の学童保育
3. OSCARプログラムとは
4. OSCARプログラムの運用基準
5. プログラムと指導員のプロファイリング
6. どんな人がOSCAR指導員をするのか

課題1

モジュール2 専門的に働くこと

1. プロであること
2. プロとして行動する
3. 自分自身をケアする
4. プロとして成長する

モジュール3 子どもとの協働

1. 子どもの発達
2. 子どもと協働する時に重要なこと
3. 子ども中心のプログラムが持つ要素
4. 子どものための活動を計画する

課題2

モジュール4 肯定的な関係の構築

1. 職場での関係を築く
2. 職場でのコミュニケーション
3. 肯定的な行動をガイダンスする
4. グループでの活動

モジュール5 安全な環境での活動

1. 安全な環境を保つ
2. 子どもの安全を保つ
3. 自分の安全を保つ
4. 法的な要件を知る

課題3

3.2.2. 「発展コース」概要

このコースは入門コースで取得した指導員に求められる基礎的な知識の理解と基本的な実践力をより専門的に発展させることを目的とした200時間・32週間の学習を標準とするコースである。

このコースで得られる学習成果として、以下の4点が示されている²⁴⁾。

- 1) OSCAR プログラムにふさわしいバイカルチャーな活動を開発できる
- 2) 挑発的な行動をする子どもたちに肯定的な行動をつくり出す戦略を開発できる
- 3) OSCAR プログラムにいる特別なニーズを持つ子どもを肯定的にインクルージョンする戦略を開発できる
- 4) バランスの取れた活動プログラムを開発できる

発展コースでは入門コースよりも、OSCAR プログラムでの実践に求められる具体的な課題への対応能力と創造的な実践力の育成が目指されている。

このコースを受講するには、入門コースで求められる要件に加えて「入門コースに合格している」という要件が加えられる。そして、このコースでも、OSCAR プログラムに職員あるいはボランティアとして60時間活動することが求められ、各課題を提出する前に少なくとも15時間活動しなければならない。最短では入門コースと同様に20週間で修了できる²⁵⁾。

コースのカリキュラムは、4つのモジュールと4つの課題から構成される。

モジュール1 バイカルチュラル・アプローチの開発

1. NZにおけるバイカルチャー主義とは
2. OSCAR プログラムにとってのバイカルチャー主義の重要性
3. tikanga と te reo Māori の事例活用
4. 地元のバイカルチャーに関するリソース
5. バイカルチャー活動の開発

課題1

モジュール2 挑発的な行動への対応

1. 挑発的な行動とは
2. 挑発的な行動をする子どもへの対応
3. サポートとリソースを得る
4. 挑発的な行動をする子どもに対する活動の開発

課題2

モジュール3 特別なニーズを持つ子どもとの活動

1. 特別なニーズを理解する
2. 特別なニーズを持つ子どもとは
3. 特別なニーズを持つ子どもへの対応
4. 最新情報を入手する
5. 特別なニーズを持つ子どもを含んだ活動の開発

課題3

モジュール4 活動プログラムの開発

1. プログラムを計画する

2. 子どもを第一に据える
 3. 多様性と選択を与える
 4. 遊びの重要性
 5. リソースを見つける
 6. バランスのとれた活動プログラムの開発
- 課題4

3.3. 学習方法

両コースとも学習はテキストにそって進める。テキストは2穴フォルダに綴じられており、必要部分を取り外して使ったり、書き込んだりがしやすい形態になっている。テキストはモジュール毎に内容説明、その内容に基づくアクティビティとその解説、リソース・キットからなる。

このテキストにそって、学生はリソース・キットに示された資料等を参照しながら、絵や図表を使ってわかりやすく説明された内容を読み進める。そして内容に関わるアクティビティに取り組んでいく。アクティビティは1つのモジュールに15前後あり、内容が理解できたかどうかを確認する学習課題が提示されている。OSCAR プログラムの指導員がスーパーバイザーとして、そしてOPNZのチューターが学習支援をする。OPNZとはEメールや無料の電話で連絡をとる²⁶⁾。

モジュールの学習が終わると課題 (Assignment) に取り組む。課題はアクティビティをさらに発展させたもので、各課題には2~4のタスクが設定されている。スーパーバイザーの支援を受けながらタスクに取り組み、その結果をOPNZのチューターに送付する。これが評価・採点され、合格者は次のモジュールに進むことができる。

3.4. アクティビティの内容

アクティビティは、個々の学習内容とモジュール末の課題を、OSCAR プログラムでの実践とをつなぐように設計されており、自分で取り組み、自分でチェックする演習である。アクティビティに取り組んだことへのフィードバックは、テキストにある「アクティビティへのコメント」と、OSCAR プログラムのスーパーバイザーから得られる。スーパーバイザーは回答を確認したり、学生の取組を支援したり、OPNZのチューターと学生の回答について話し合ったりする。

入門コースの84、発展コースにある75のアクティビティの内容は、大きく4つに分類できる。その主なものを以下に示すが、入門/発展の後の数字はモジュール、その後はアクティビティのナンバーである。

①学習内容を確認するアクティビティ (36)

・入門1-3「ニュージーランドのOSCAR サービスについて読むと、次の用語に出くわすことがある。左側の列の用語を右側の列の正しい説明に一致させさない。」

- ・入門 3 - 3 「子どもの発達のいくつかの段階についての次の記述は、一般的に正しいか誤りか？」
- ・発展 1 - 15 「正しいマオリの母音を使用して、次の場所の名前を発音しなさい。」
- ②学習内容について自分の OSCAR プログラムを調べるアクティビティ (51)
 - ・入門 1 - 2 「あなたの OSCAR プログラムの歴史について調べなさい。」
 - ・入門 3 - 10 「あなたのプログラムでの子どもたちの遊び方をいくつか挙げなさい。」
 - ・発展 3 - 4 「あなたのプログラムが特別なニーズを持つ子どものケアについてカバーしている方針と手順を持っているかどうかを調べなさい。」
- ③学習内容について自分自身はどうかを考えるアクティビティ (17)
 - ・入門 1 - 13 「あなたが OSCAR ワーカーになる理由、または OSCAR ワーカーになりたい理由を記入しなさい。」
 - ・入門 2 - 9 「どんなことにストレスを感じるか？」
 - ・発展 3 - 11 「特別なニーズを持つ子どもと一緒に活動するためにあなたがすでに持っているスキルをリストアップしなさい。」
- ④学習内容を実践するためのアクティビティ (60)
 - ・入門 2 - 6 「次のいずれかの状況で意思決定スキルを練習する。あなたならどうするか？」
 - (a) 子どもが成人向け雑誌を自宅からプログラムに持ってきた。
 - (b) プログラムに参加する 12 歳の子どものうち 2 人が、地元の牛乳屋からお菓子を買うために通りを下りたいと考えている。両親からの許可は得ている。」
 - ・入門 5 - 14 「子どもたちをプログラムから近くの公園に連れて行く前に考慮すべきことを書き留めなさい。」
 - ・発展 4 - 11 「子どもたちは、ボールを使ったタグ・ゲームをしたいと思っている。このゲームをどのように変更すれば、室内で遊べるか？」

3.5. 評価方法

各モジュールでの学習後に、その成果を評価するために実施される課題 (Assignment) には、各モジュールで学習した内容とアクティビティで取り組んだことの復習、それをふまえて OSCAR プログラムで実践するための計画づくりや、OSCAR プログラムで一定期間実践した記録とそれを分析・考察するタスク等がある。

両コースの課題の内容は以下の通りである。

<入門コース>

課題 1・・・モジュール 1

- タスク 1 学習時間割の作成
- タスク 2 OSCAR 制度の全体像
- タスク 3 あなたのプログラムのプロフィール
- タスク 4 指導員としてのあなたのプロフィール

課題 2・・・モジュール 2、3

- タスク 1 専門職としての活動指針の作成
- タスク 2 専門職としての職能開発計画の作成
- タスク 3 混合年齢の集団活動の計画・実行・評価

課題 3・・・モジュール 4、5

- タスク 1 子ども・保護者・スタッフとコミュニケーションした事例の作成と省察
- タスク 2 あなたのプログラムで安全な環境で活動するためのリスク・アセスメント
- タスク 3 あなたのプログラムの掲示板に貼る緊急連絡先リストの作成

<発展コース>

課題 1・・・モジュール 1

- タスク 1 学習時間割の作成
- タスク 2 バイカルチャーに関する復習とそれをプログラムで実践するための構想
- タスク 3 プログラムで利用できるバイカルチャーに関するリソースの調査
- タスク 4 プログラムでバイカルチャー活動に取り組む計画・実践・評価

課題 2・・・モジュール 2

- タスク 1 過去 6 ヶ月にプログラムで子どもが示した挑発的な行動の記録とそれに対する働きかけの計画づくり
- タスク 2 あなたのプログラムで挑発的に行動する子どもとの「行動契約書」の作成
- タスク 3 子どもの挑発的な行動に対応するためのミニ・リソースキットの作成
- タスク 4 プログラムで挑発的な行動をする子どもの分析・実践・評価

課題 3・・・モジュール 3

- タスク 1 特別な支援に関する復習
- タスク 2 プログラムで特別な支援を必要とする子どもの観察・分析と指導方針作成 (そうした子がいない場合は、掲載された事例をもとに)
- タスク 3 一つの特別なニーズについての調査
- タスク 4 プログラムで特別な支援を必要とする子どもに対する実践の計画・実践・評価 (そうした子がいない場合は、掲載された事例をもとにケーススタディ)

課題 4・・・モジュール 4

- タスク 1 活動のアイデアや発見した有用なリソース (道具や材料) の収集
- タスク 2 全体的な活動プログラムの開発 (放課後プログラムの 4 週間分、または休日プログラムの 2 週間分)

テキストに、ワークシートの様式があるので、それに書き込みながら進めていく。課題に取り組む際に役に立

つ資料もテキストに示されている。

スーパーバイザーは、学生が OSCAR プログラムでタスクに取り組んだこと、この間の活動時間、モジュール内のアクティビティの完了を確認し、証明する。

OPNZ のチューターは「必要な基準をどのくらい満たしているか」「明確かつ正確に表現されているか」という観点から、以下のように採点する²⁷⁾。

結果	採点	評価
不合格	50% 以下	基準を満たしていない。基本的な理解にギャップがあるため不完全な回答がある。 表現が不明確で不正確。 基準を満たすには援助が必要。
合格	50% - 65%	基本的な知識、スキル、理解、表現について基準を満たしている。
優良	66% - 79%	全タスクの少なくとも 50% で合格基準を満たし、基準を超えている。全体的に明確で正確な表現で、エラーはほとんどない。
優秀	80% - 100%	タスクの 80% で明らかに基準を超えている。優れた表現。

コースに合格するには、各課題で「合格」以上を取得する必要がある。

課題毎に 1 回の「再評価」の機会があり、不合格の結果を受け取った場合は、再評価のためにもう一度レポートを提出できる。しかし、再評価のために提出されたレポートは、「合格」より上の評価になることはない。

最終的に、入門コースの場合は課題 1 が 20%、2 が 40%、3 が 40%、発展コースはどれも 25% のウェイトがかけられ、最終評価が出される。

4. OPNZ の指導員養成課程の特徴

OPNZ の指導員養成課程の特徴を、内容面、方法面、制度面の 3 点から検討すると以下ようになる。

4.1. 内容的特徴

指導員の役割は、両親がいないときに 5～13 歳の子どもをケアするとともに、子どもたちに社会的で、質の高い余暇の体験を提供することとされる。さらに、以下のような重要な役割を担うとされている²⁸⁾。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 異年齢の子ども間関係の構築 ・ 特に家庭の学習環境がよくない子どもの宿題の援助 ・ 自身の文化についての知識の強化 ・ ポジティブな行動の選択肢を示し、非行防止を図る ・ よいロールモデルとなる大人との接触機会の提供 ・ 保護者の子育て支援 ・ 移民家族への情報提供と支援

これらの役割規定において、子どもたちへの保育に関して特徴的なのは、第一に、「自身の文化」に着目していることである。これは特に、発展コースのモジュール 1 で学習する「バイカルチャル・アプローチの開発」で取り上げられる。ニュージーランドは先住民であるマオリの文化と移住してきたイギリス人の文化の二重文化国家であるとともに、積極的に移民を受け入れているため、それぞれの文化を尊重する価値観・態度の育成が重視されている。第二に、子どもたちのポジティブな行動を引き出すガイダンスの機能を重視していることである。OSCAR には低所得家庭の子どもが多いこともあり、いわば「積極的な生徒指導」が行われることが期待されている。保護者支援に関して特徴的なのは、移民家族への情報提供と支援の役割が期待されていることである。

このような役割を担うために、OPNZ で育成しようとしているのが、以下の資質・能力である。

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ①子ども中心の学童保育実践力 ②コミュニケーション能力 ③行動ガイダンス力 ④安全マネジメント力 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

①子ども中心の学童保育実践力

「子ども中心」とは、「子どもの利益と福祉を一番に置く」ことであり、「子どもたちの活動に参加」しようとし、「子どもと一緒に活動を楽しむ」ことである。そのためには、一人一人の子どもを尊重し、子どもたちの世界観は大人のものとは異なることを理解することが重要とされる。そして、活動プログラムについて決定するときは、常に子どものニーズを最初に考慮することを求める²⁹⁾。

子ども中心の活動プログラムの開発については入門コースのモジュール 3 に詳述されている³⁰⁾。すなわち、第一に子どもたちの発達について理解する必要があり、発達段階の特徴にふさわしいものであること、その上で、個々人の発達状況や特別なニーズ、そして、文化的なニーズをふまえた多様性と選択肢を提供できるプログラムであることが求められている。

第二に、次のような要素をもった活動プログラムにすることが求められている。すなわち、「安全性」「快適さ」「運動・身体活動」「栄養」「刺激的環境」「能力の発揮と達成感」「責任と自立」「思いやりと自尊心の育成」である。安全性に加えて、子どもたちの身体的、社会的、知的、創造的、感情的な発達をつくり出すことが求められている。

「発展コース」の「モジュール 4 活動プログラムの開発」にはそのための計画づくりについて詳細に示されている³¹⁾。そこでは、1) 一つの活動（図画工作、運動・身体活動、静かな活動、音楽・ダンス・ドラマ、料理等の活動）に取り組む際の計画、2) 1 日の日課表、3) 2～4 週間の計画等、短期・長期の計画づくりが示されている。

＜放課後プログラムの日課表の例³²⁾＞

午後 3:00	子どもたち到着
午後 3:15	アフタヌーン・ティー
午後 3:30	屋内外での遊び 必要な子は宿題
午後 4:00	計画した活動の開始
午後 5:00	全員室内でグループ活動の時間
午後 5:30	片付けの時間 外で遊ぶか静かな遊びをする
午後 6:00	閉所

この日課表を見ると、午後 4:00 から「計画した活動」に取り組むことになっている。多くの OSCAR プログラムで計画的に子どもたちの発達をつくり出す活動が行われるため、この活動を計画し実践できる学童保育実践力の育成が目指されている。

②コミュニケーション能力

指導員に求められるコミュニケーション能力については入門コースのモジュール 4 に示されている。OSCAR は子ども・保護者・スタッフ等が日常的に出会い、交流し、関係を構築する場であり、指導員は安全・安心で、公平性・平等性を重視し、インクルージョンの視点を持って、多様な文化を尊重して関係を構築する必要がある。そのためには、子どもたちと、スタッフ間で、保護者との間でポジティブな関係を構築できる高いコミュニケーション能力が求められる³³⁾。

優れたコミュニケーションターには「メッセージの明確さ」「聞き手への配慮」「聞き手の理解の確認」「意図しない非言語メッセージへの注意」「自分のコミュニケーションとしての長所・短所の認知」「支持的な聞き手」「気持ち（感情）も考慮」といった基本的スキルが必要とされている³⁴⁾。その上で、対象に応じたスキルが求められる。

子どもたちとのコミュニケーションの際には、「最初に注意を引くこと」「適切に非言語コミュニケーションを活用すること」「質問すること」「子どもを個人として尊重すること」が重視されている。子どもの発達段階や多様性を考慮したコミュニケーション能力である³⁵⁾。

スタッフ間のコミュニケーションにおいては、会議の場だけではなく、短時間・非公式のブリーフィング（打ち合わせ・情報共有）や文章でのコミュニケーションを組み合わせることで、そして、建設的な相互批判のあるコミュニケーションが求められている³⁶⁾。

保護者との間のコミュニケーションでは、毎日のお迎えの時に、その日の子どものニュースを共有すること、「ニュースレター」や「掲示板」を活用したコミュニケーションの有効性も示されている³⁷⁾。

③行動ガイダンス力

「ガイダンス」とは、学校教育学においては子どもたちが学校生活に適応し、円滑な人間関係を形成し、主体的に決定を行う態度や能力を育成する働きかけとされている。つまり、主体的で共同的な行動ができる自立した

人間を育む指導と行うことができる。OSCAR プログラムは、学校と比べると、時間の使い方が柔軟で、子どもたちに与えられた選択肢が多く、スタッフと子どもの関係が緩やかであるため、子どもたちは規範意識を持ちにくく、集団を混乱させたり、他者を傷つけるような挑発的な行動（Challenging behaviour）をとりがちである。そのため、OSCAR プログラムでは学校以上に子どもの行動をガイダンスし、ポジティブな行動を引き出す働きかけが必要となる。

そのために指導員に求められていることが、発展コースのモジュール 2 に述べられている³⁸⁾。第一に、子どもの行動に対する言語的なフィードバックを行うことである。その行動がポジティブなものであってもネガティブなものであっても「見たこと」を伝えることで自分の行為を振り返ることができる。その上で、「見たいこと」を伝えることで、次の目標となる行動を示し、その行動をとることを期待していることを伝える。

第二に、行動の「境界」、すなわち、行動の基準やルール、約束、きまりを子どもたちと共につくり、それを掲示するなどして共有することである。

第三に、子どもたちが興味を持ち、主体的で共同的な行動をしたくなるような生活環境や活動プログラムをつくり出すことである。

第四に、指導員全員が共通の基準と手順を持って子どもたちの行動に働きかけることができるように、ガイダンス・ポリシーを作成し、指導員間で共有することである。

第五に、集団活動を重視し、子どもたちに選択肢やリーダーシップを与えながら、豊かな人間関係を形成できるように働きかけることである。

④安全マネジメント力

OSCAR において「安全」は最も重要なキーワードの一つである。入門コースのモジュール 5 には「安全」について、OSCAR プログラムの環境の安全、子どもの安全、指導員の安全という三つの視点で示されている³⁹⁾。

環境の安全を確保するためには、安全衛生や食品安全に関するガイドラインを策定し、それを厳密に遂行することが求められている。

子どもたちの安全を確保するためには、監督する体制を確立し、監督の仕方についてガイドラインをつくり、計画的に監督すること、あらかじめどのような危険が予想され、それらを排除・分離・最小化し、起こったらどう対処するかを想定するリスク・アセスメントを行うこと、事故・事件は全て記録し、迅速な判断・対応が必要であること、児童虐待や自然災害対応等も準備しておくこと、そして、子どもたちの身体的な安全だけではなく、心の健康も含めた子どもたちの全体的な健康を確保すること等が示されている。

指導員が自身の安全を守ることの大切さも示され、一人の人間として身体的・文化的・感情的に危害を加えら

れないようにすることと、役割や経験以上の責任を負うことがないようにすることなど専門職としての安全が確保される必要があると指摘している。

4.2. 方法的特徴

次に、方法面における特徴を3点指摘したい。

①オン・ジョブ・トレーニングによる「実習」

上述したように、学生は必ずどこかの OSCAR プログラムに指導員として所属しなければならない。そして、受講している間、各コース最短で20週間、60時間以上学童保育所で活動しなければならない。受講する前から指導員として働いていた場合はそれを継続し、働いていなかった指導員は職員としてボランティアとして活動できる OSCAR プログラムを自ら探さなければならない。

このような仕組みによって、学生は実地で活動しながら学習をすることができる。すなわち、「実習」しながら学習を進め、理論と実践とを往還する学びが可能となる。

②「アクティビティ」と「課題」における「理論の実践化」と「実践の省察」

理論と実践とを往還する学びを深めるのが、「アクティビティ」と「課題」である。テキストを読んで学習した知識・理論知について実践現場ではどうなっているのか、どう行われているのかを調査したり、自分自身が実践者として主体的に取り組んだりすることで、文章で書かれた知識・理論知は実践で役に立つ知識・理論知へと昇華する。

③スーパーバイザー＝実習指導者の役割

学生はこのコースを受講するためには、スーパーバイザーを確保しなければならない。スーパーバイザーによって「実習」での学習、調査、実践が深められる。スーパーバイザーは OPNZ のチューターと連絡・連携をとりながら、学生の学びを支援する。こうした学習方法が OPNZ における通信・遠隔教育の質を高めている。ただ、学びの質がスーパーバイザーに大きく依存しているため、高い専門性と学生指導力を持ったスーパーバイザーを育成する必要があるが、その資格や養成・研修制度はない。

4.3. 制度的特徴

最後に、制度面における特徴を2点指摘したい。

①通信制による遠隔教育

OPNZ は通信教育であるため、場所や時間を問わず、多様な学習者を受け入れることができる。就業者も就学でき、指導員でなくても、週3時間何らかの形で OSCAR プログラムで活動できればよい。ただし、直接講義を聴き、対面で質問や議論をするといったことはできない。しかし、上述したように理論と実践を往還する「実習」の仕組みがあるため、専門職に求められる実践的な能力を獲得することはできる。

②学位を伴わない履修修了証 (Certificate) であること

この OPNZ のコースは学位プログラムに位置づかない短期間のコースである。短期間で、OSCAR の指導員

に求められる実践的な内容を集中的に学ぶことができるメリットがあるが、修了しても学位につながらない。

また、指導員に関する国家資格がないため、修了しても資格を得ることができない。そのため、このコースの修了が、OSCAR プログラムへの就職に有利に働いたり、そこでの待遇の改善・向上につながったりすることもない。このような制度的な問題がこのコースの2019年度での廃止につながったことが、関係者へのインタビューから確認された。

5. おわりに

本論文では、学童保育を日本と同様に児童福祉に位置づけ、多様な運営主体による多様な学童保育を容認するニュージーランドにおいて学童保育指導員の養成を行う OPNZ の指導員養成課程の教育内容・課程、教育・学習方法、評価法等を検討してきた。そして、その結果、内容としては、子ども中心の学童保育実践力、コミュニケーション能力、行動ガイダンス力、安全マネジメント力を育成することが重視されていること、方法としては、通信教育の中でオン・ジョブ・トレーニングによる「実習」が位置づけられ、理論と実践の往還ができる学習方法が行われていること等を明らかにした。しかし、この指導員養成課程は2019年度をもって終了してしまった。その要因に、継続して活動ができる OSCAR プログラムと指導してくれるスーパーバイザーの存在を必要とする受講要件の難しさ、そして、この課程は学位や資格に繋がっていないことを指摘した。さらに加えれば、OSCAR プログラムが極めて多様であるにもかかわらず、一定の OSCAR 像を設定して目指す指導員像に向けて養成を行うというコンセプト自体が受け入れられなかった、という点も指摘できる。

日本で大学における学童保育指導員養成課程を考えると、OPNZ の取組は以下の点で大いに参考にできる。というのも、第一にその教育内容は日本の学童保育指導員に求められる専門性の内容にマッチしていることである。第二に働きながら就学し、理論と実践とを往還できる遠隔教育という方法の有効性である。第三に日本で導入する際には、学位や資格と結びつけるとともに、理想だけではなく現場の現状や問題に適切に対応する実践力の育成を目指す必要があるということである。

付記：本研究は JSPS 科研費 JP18H01002 の助成を受けたものです。

注及び参考文献

- 1) 「放課後児童健全育成事業の設備及び運営に関する基準 (平成26年4月30日厚生労働省令第63号)」第10条第3項第10号。なお、この第10号の規定は

- 平成 30 年 4 月 1 日より施行された。
- 2) 日本で学童保育指導員のための民間資格を養成している大学は、(特非)日本放課後児童指導員協会の「放課後児童指導員」資格を養成する中国学園大学子ども学部、鈴鹿大学こども教育学部及び短期大学部こども学専攻(幼稚園教諭・保育士コース)、佐賀女子短期大学専攻科こども学専攻、そして、(一社)学童保育指導員協会の「学童保育士」資格を養成する日本福祉大学子ども発達学部である。
 - 3) 松村祥子、野中賢治編著『学童保育指導員の国際比較—放課後児童クラブの発展をめざして』中央法規出版、2014年、を参照されたい。
 - 4) 杉山隆一「学童保育指導員の養成内容と養成機関」学童保育指導員専門性研究会編『学童保育研究』No.5、かもがわ出版、2004年、26-34頁及び杉山隆一「学童保育指導員の資格化と養成」学童保育指導員専門性研究会編『学童保育研究』No.10、かもがわ出版、2009年、58-64頁。
 - 5) 中田周作・中山芳一「放課後児童指導員の資格認定カリキュラムの開発—日本放課後児童指導員協会の取組から」日本学童保育学会編『学童保育』第1巻、2001年、45-54頁。
 - 6) 松村祥子、野中賢治編著 前掲書。
 - 7) 住野好久・植木信一・松本歩子・中山芳一・鈴木瞬「大学における学童保育指導員養成に関する研究—スウェーデン・ストックホルム大学の養成課程の検討を中心に—」日本学童保育学会編『学童保育』第10巻、2020年、47～57頁。
 - 8) ニュージーランドの学童保育及び指導員養成を紹介したものに、松本歩子「ニュージーランドの学童保育」日本学童保育士協会編『学童保育研究』第14号、かもがわ出版、2014年、78～80頁、がある。
 - 9) 2020年2月11～19日に、ウェリントン及びオークランドで学童保育関係者の調査を行った。ただし、新型コロナウイルス感染症のリスクがあり、オープン・ポリテクニクでの調査はできなかった。
 - 10) OECDの統計によると2019年の女性就業率はニュージーランドが73.2%、日本は71.0%である。
<https://data.oecd.org/emp/employment-rate.htm>
 - 11) Summary Offences Act 1981, 10B. この条文には合理的な監督とケアをせずに14歳未満の子どもを放置すると2000ドル以下の罰金が課せられると規定されている。
 - 12) OSCAR制度については以下のWEBサイトを参照。
社会開発省：<https://www.msd.govt.nz/what-we-can-do/providers/social-services-accreditation/level3/oscar-approval-process.html>
OSCARセクター：<https://www.oscarnz.nz/>
 - 13) 社会開発省労働収入庁のWEBサイトを参照。
<https://www.workandincome.govt.nz/products/a-z-benefits/oscar-subsidy.html>
 - 14) Social Sector Accreditation Standards (Level 3)を参照。<https://www.msd.govt.nz/documents/what-we-can-do/providers/social-services-accreditation/social-sector-accreditation-standards/social-sector-accreditation-standards-level-3.pdf>
 - 15) OSCNのWEBサイトを参照。<https://www.oscn.nz/>
 - 16) OSCAR NetworkのWEBサイトを参照。
<http://www.oscarnetwork.org.nz/>
 - 17) 工科大学&ポリテクニクのWEBサイトを参照。<https://www.studyinnewzealand.govt.nz/study-OPNZtions/institutes-of-technology/>
 - 18) 職業教育改革については、ニュージーランドの高等教育委員会(Tertiary Education Commission)のWEBサイトを参照。
<https://www.tec.govt.nz/rove/>
 - 19) オープン・ポリテクニクのWEBサイトを参照。
<https://www.openpolytechnic.ac.nz/about-us/about-open-polytechnic/who-we-are/>
 - 20) Open Polytechnic of New Zealand(2012a): 4290 Introduction to Out of School Care and Recreation, Course Information, p.8.
 - 21) *Ibid.*, Course Information, p.2.
 - 22) *Ibid.*
 - 23) *Ibid.*
 - 24) Open Polytechnic of New Zealand(2012b): 4291 Extension to Out of School Care and Recreation, Course Information, p.1.
 - 25) *Ibid.*, Course Information, p.2.
 - 26) Open Polytechnic of New Zealand(2012a). op. cit., Course Information, pp.8-10.
 - 27) *Ibid.*, Course Information, pp.5-6.
 - 28) *Ibid.*, Module 1, p.25.
 - 29) *Ibid.*, Module 1, p.38.
 - 30) *Ibid.*, Module 3, pp.1-73.
 - 31) OPNZen Polytechnic of New Zealand(2012b). op. cit., Module 4, pp.1-111.
 - 32) *Ibid.*, Module 4, p.43.
 - 33) Open Polytechnic of New Zealand(2012a). op. cit., Module 4, pp.6-7.
 - 34) *Ibid.*, Module 4, pp.12-15.
 - 35) *Ibid.*, Module 4, pp.17-23.
 - 36) *Ibid.*, Module 4, pp.24-26.
 - 37) *Ibid.*, Module 4, pp.27-29.
 - 38) Open Polytechnic of New Zealand(2012b). op. cit., Module 2, pp.1-71.
 - 39) Open Polytechnic of New Zealand(2012a). op. cit., Module 5, pp.1-80.